
それでもあなたが好きだから・・・

a n g e l

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでもあなたが好きだから・・・

【Nコード】

N0650G

【作者名】

angel

【あらすじ】

哀はコナンが好き。しかし、コナンは蘭が好き。この伝わらない思いを抱えながら日々、生きていた。しかしある人との出会いの陰で哀は少しずつ変わっていく。コナンはその思いに気づくのか？2人の恋はどうなるのか？初コ哀です！！ちなみに、また会える日まで、とは別の連載と考えてくださいね！！

ブローグ；一途な想いで・・・

ある金曜日の放課後――

哀は少年探偵団と一緒にかくれんぼをしていた。

「じゃーんけーんばい!!」

見るとコナン、歩美、哀、光彦はグー、元太がチヨキだった。

「元太君が鬼だね!!じゃー、100数えてから探してよ!!」

それを合図に4人は隠れ始め、後の元太は数え始めた。

「1、2、3、・・・46、57、58・・・」

(児嶋君、10秒飛ばしてるわ)

哀はそう思いながらも、声を出さずに隠れていた。

「99、100!!」

そついうと元太は探し始めた。

まず最初に見つけたのは光彦で、彼は、土管の中に隠れていた。

「光彦見つけたぜ!!」

「元太君、これは科学的に見つかりにくいんですよ!!今日の洋服と一緒の色ですし・・・」

(どこがよ！それが科学なら、私がしていたのはなんだったのかしら？)

哀がそう思っていると、次にコナンと歩美が見つかった。

「コナンと歩美見つけた！！お前ら、なに仲良く話してんだよ！！かくれんぼしてんだぞ！！」

コナンは急いで言った。

「しゃーねえだろ？歩美ちゃんが話しかけてきたんだから」

「だって私とコナン君は結ばれる運命だもん！だからーの！！」

(吉田さん・・・すごいわね。言い切れるんだもの)

哀は考えているだけのつもりだったが、気づかないうちに口に出して言っていた。

「私には無理ね・・・工藤君・・・あなたの気持ちを知ってるんだもの。それにもう子供じゃない・・・ここは引くべきなの・・・いくら好きで・・・憧れであっても・・・私の思いはあなたには届かない。蘭さんがいるから・・・けど、一度でいいから・・・私の夢を実現させたいな」

哀は深く考えていたせいで気がつかなかった。後ろに元太がいたことに・・・

「灰原！！やっと見つけたぞ！！」

「えっ!!」

哀がびっくりしていると他の3人もやってきた。

「元太、灰原見つけんのにどんだけかかってんだよ!!」

元太はそう言ったコナンに不服を漏らした。

「しゃーねーじゃんか!!灰原って気配がないんだからよ!!けどよ」

元太は少し間をおくと言った。

「今回だけはなんか言ってたんだよな。子供じゃねえとか・・・夢の実現とか・・・」

歩美はそれを聞いて哀に聞いた。

「哀ちゃんの夢ってなに?」

哀は本当のことを言うわけにはいけないので少しうろたえていたが、言った。

「私の夢は・・・楽しく生きることかしら?」

歩美はそれを聞いて笑った。

「じゃあ、哀ちゃんの夢、叶ってるね!!今楽しいでしょ?」

「ええ。そうね」

哀が歩美と話し終わると、次はコナンが話しかけてきた。

「なあ、何言つてたんだ？ ホントはそんなことじゃねえんだろ？」

哀は、ふつと笑うといった。

「あなたにだけは知られたくないわね」

「はあ？」

コナンはその言葉は気になったようだが、それ以上追求する気はないらしく、次する鬼ごっここのじゃんけんのため、3人がいる場所に走っていった。哀は走る気はないらしく歩いていった。

哀はさっきのことを聞かれてなかったので安心していった。しかし、気づかぬ間に背後にそれを聞いていた人がいたのだ。しかし、それに気が付いた人はいなかっただろう。たとえコナンであっても・・・

ブログ：一途な想いで・・・（後書き）

まず、謝らなければならないことがあります。

昔、allie先生に感想をもらった時、コ哀は書かない！！と言いました！！けど、今書いてます。

どうしても書きたかったんです。理由になってませんね（汗）

とりあえず、これは謝らせてください！！すみませんでした！！
今回の連載はコ哀です！！

だから、変なところあると思います・・・
だからもしそれが分かるなら、教えてください！！

評価、感想、そして訂正、お待ちしてます

第1話・光彦の要求

「じゃ、今日は帰ろうよ、もう遅いよ」

歩美がそういったのを聞いて、光彦が言った。

「そうですね、もう帰りましょうか。」

「おう、じゃーな」

そう言つてコナンと哀、歩美と光彦と元太に別れ、帰ろうとした。すると光彦が思い出したように言った。

「あ、コナン君、今日僕の家に来てくれませんか？話したいことがあるんです。お母様も晩御飯を用意してくださってます」

コナンはいきなりの話におどろいた。

「だけど俺、蘭・・・姉ちゃんに言つてねえぞ。だから行けるか分かんねーけど」

「じゃあ今すぐ聞いてください！！蘭さんなら許してくれますから！！」

光彦の眼は真剣だった。コナンにはそんな純粋な気持ちの光彦を見て少し迷った。

「行つてあげなさいよ。円谷君真剣なんだから」

それは哀の声だった。哀は本当に行つてあげて欲しそうだった。

「あ、ああ」

コナンは携帯を取り出すと、急いで電話した。

「あ、コナン君？今日は焼肉よ。早く帰つて来てね」

コナンは息を吸うと、申し訳なさそうに言った。

「あのさ、蘭ねえちゃん。僕、今から、光彦の家に行つて来るね。晩御飯はいらないから」

蘭は驚いたようだった。

「朝はそんなこと、言つてなかったわよ？どうしたの、急に？」

「ごめんね。すっかり言い忘れてたよ」

コナンは精一杯の子供の演技で答えた。蘭は少し悩んでいたが、口を開いた。

「いいわ、行つて来て！！でも残念だね、一緒に食べたかったんだよ？」

コナンは本当に申し訳ないと思ひながら言った。

「ごめんね、明日は一緒に食べよう？じゃあね」

やつのことで電話が終わると、哀が聞いてきた。

「大丈夫だったの？」

「ああ、だから光彦、お前んちへ行けるぜ」

光彦はその言葉を聞いて、コナンに感謝した。

「ありがとうございます！！じゃあ行きましようか」

行こうとすると、元太が止めた。

「でも、灰原１人で帰れんのか？無理じゃねーか？」

歩美もその言葉に賛成した。

「哀ちゃんだから迷わないと思うけど、危険だよ。歩美と一緒に帰ろうか？」

哀はその言葉を一言でさえぎった。

「いいわよ。少ししか距離がないんだし。じゃあね」

「う、うん」

歩美はまだ心配そうだったが、有無を言わさぬその言葉の雰囲気には反対できなかった。５人はそこで別れると、それぞれの道に進んでいった。哀は大丈夫といったが――不審な影はまだいたのだ。哀の真後ろに・・・

それに気が付かなかった哀は手足と口を拘束され、連れていかれて

しまった。
ある場所へ・・・

第1話・光彦の要求（後書き）

今回の作品を読んだ方は、あらすじのことが、全然起こらない！！と思われてると思います。

・・・はい。その通りです。でも、今回の話には、つながりの意味のほかにも、ちゃんと意味があるんです。次回になったら分かりますよ。次は哀ちゃんか、コナン君かどっちを先に書くか悩みましたが、哀ちゃんのほうを先に書きたいと思います！！

プロローグ・・・プロローグと言っていいんでしょうかね？心配です。

では、次回楽しみにしててくださいね（笑）
出来るだけ上手くまとめますんで！！

第2話・平次の考え

哀は怪しげな男に運ばれた。そして、そのまま哀は意識を失ってしまった。

気づいたのはそれからかなり時間が過ぎた時・・・哀は意識を取り戻した。

「・・・あ、なた・・・誰？ 苦しい・・・」

哀は必死にそう訴えた。それに気がついた犯人は手を離し、ゆっくり下ろした。

「俺や俺！」

そう・・・それは平次だったのだ。哀は出会った感動より先に非難が言葉となって表れた。

「服部君、あんなに強く押さえないでくれる？ かなり苦しかったのよ！」

「あつ、気がつかへんかったわ。もっと緩う掴めば良かったんやな」

平次は反省しているようだった。哀はそれを見てクスツと笑うと言った。

「いいわ。それなりに楽しめたし。それで、私に何の用？ 工藤君に用があるんなら行き先教えてあげるわ」

平次は首を振ると言った。

「今回は工藤に用があつたんちゃう。あんたに用があつたんや」

哀は驚いていた。しかし、もっと驚いたのは、見たことのない世界が眼中に広がっていることだった。

「ここはどこ？こんな所知らないわよ！！」

哀は少々パニックになっていた。それを落ち着かせるかのように、低い、落ち着いた声で、平次は語りかけてきた。

「今大阪に行く途中や。しばらくじっとしとけ」

哀は降りたかったが、この状況ではなす術がなかったので、言われたとおりじっとしていた。

降り立った場所――そこは平次の家だった。

「凄い豪邸ね。本当にあなたの家なの？」

平次は何事もないかのように答えた。

「ああ。何にもない家やで、ここは。広いだけや」

「そうね。あなたならそう思っても不思議じゃないわ」

平次は価値観を否定されなかったことが少し嬉しかったようだった。しかし、本題を思い出すと、すぐに顔つきを変えた。

「そうや、話があるんや。とりあえず、ついて来てくれや」

哀はそういわれたので、平次の後ろをついていった。

「平次、その子はだれや？みたことあらへんけど」

たまたまりビングにいた静華は話しかけてきた。平次は億劫そうに言った。

「俺が今助けたい子や。オカンにも朝行く時言つたけど」

静華は少し考えた後、思い出したように言った。

「ああ！！言うとなあ！！頑張りや、平次！」

静華はそれだけ言うときのように雑誌を読み始めた。

平次も、無口になって上に上っていった。

階段を上って、平次の部屋に入ると早速平次は話しかけてきた。

「まあ座ってくれや。ソファはないから地べたやけどな」

そういわれて、哀は指示通り座った。平次も座ると、早速本題を切り出してきた。

「今回、誘った理由は姉ちゃんのお気持ちに関することや。これは工藤に聞かれても困るし、秘密に進めたいと思うところからな」

そういうと哀の返事もまたずに平次は話し始めた。

「姉ちゃんは工藤のこと好きやろ？今日も言うつつたしなあ」

「なっ！！聞いてたの？」

哀は意外な展開に驚いていた。平次は哀の反応にさほど驚くこともなく言った。

「今日姉ちゃんのこと待つつたときに、聞こえたんや。それ以前にも知つつたけどな。でな、教えたいことがあるんや」

哀はその緊迫した展開に息を呑んだ。平次は普段と変わらないトーンで答えた。

「俺、毛利の姉ちゃんと工藤がくつつけばいいと思つつたんや。あの2人なら美男美女コンビで上手くやっていけるやろ、ってな。けどな・・・あの姉ちゃん、少し嫉妬深いと思うんや。前な、工藤が正体ばれそうになったときの話を話してくれたことあってなあ。その時、工藤な、“蘭の目つきが怖かったぜ。ホント、普段の蘭からは考えらんねえ。マジやばかった”みたいな事言うつつたんや。それ聞いてな、毛利の姉ちゃんは、優しいけど嫉妬深いと思ってしもたんや。もし、工藤が違う子とデートしてたら、付け回すんちゃうかって・・・だから、工藤のためを思うと姉ちゃん、あんたがパートナーになつたほうがええと思うんや。・・・どうや？」

第2話・平次の考え（後書き）

ずいぶん遅れてすみません。

次話やっと思きました！！学校ですが・・・
授業中、暇ですし・・・

仕上げは家でしましたけどね（笑）

コナン＆光彦はもう書きましたけど、哀ちゃんたちはもう少しかかりそうです・・・

では！！

第3話・哀の返事は・・・？

哀は意外だった。平次が自分をパートナーに推薦したこと、そして何より、蘭をそんな風に思っていたことだった。しかし、自分を推薦してくれたことは、嬉しいようだった。けど、平次に本音を言うことは出来なかった。

「私が？出来るわけないじゃない。工藤君の相手は蘭さんって決まってるもの」

哀はそう答えた。本当はあまり言いたくなかったが、諦めるためには仕方がないことだった。そう思うことによつて、哀は自分に暗示をかけようとした。しかし、平次は、簡単には諦めなかった。

「あのなあ、俺の言うてる事分かつとるか？姉ちゃんしかおらんのだ。工藤のことを分かつてあげられるんは。毛利の姉ちゃんは分かつとるようで分かつてへん。けど、姉ちゃんはわかつとる気がするんや。俺の勘は間違つてへん、絶対にな！」

平次はそう言つて二カつと笑つた。その笑顔はそれが正しいといわんばかりの顔だった。しかし、哀にはそんな自信がどこからわいてくるのか疑問だった。平次は、その後も続けた。

「俺な、工藤が大変な思いしてきたんは見てもよう分かんねん。あんなに苦労するんも工藤ぐらいや。だから頼んでん、工藤を幸せにしてやりたいしな。これは、親友としての、俺の願いや」

哀はそれでもうん、と言えなかった。そして、気持ちとは裏腹に、平次に怒鳴ってしまった。

「なにいつてるの！！私だってそうしたいわよ！！でも、工藤君の10年以上の片思いなんて変えられるわけがないもの。それに蘭さんは私のお姉ちゃんに似てる、だから邪魔なんてしたくないの！それに工藤君の幸せを奪いたくないし」

平次はそれを聞いてにやつと笑った。

「なるほどなあ・・・あんたが毛利の姉ちゃんの邪魔しとくない理由、分かったわ。“あんたの姉ちゃん”のトラウマやな？任せとき。工藤の幸せはあんたが導いてやればいいから簡単や。全部俺がやったるからついて来てや？な？」

その言葉には、今までよりも大きな自信が見えた。哀はそれを見て、平次に任せることを決意した。そう決めた時、哀は少しためらいながらも返事した。

「そうね・・・あなたに任せるのもいいかもしれない。私でも・・・工藤君と一緒にする方法があるんでしょ？」

「ああ」

そういつて平次はにやつと笑った。

「これで、姉ちゃんと工藤は幸せや。後は・・・あの姉ちゃんの幸せや・・・どうしよか・・・」

哀はそれを聞いて小さい声ながらも言った。

「それは私に任せて・・・蘭さんの幸せは私が保障するから・・・」

「よっしゃ!!これで決定やな!!じゃ、手回ししよか!」

・
そついうと平次は電話をかけ始めた。哀とコナンの幸せを願って・
・

第3話・哀の返事は・・・？（後書き）

今回も遅れましたね（汗）

そうでもないのかな？

また会える日まで、進みません・・・

調子悪いです・・・なぜか・・・

スランプってほど上手くないですけどね！！

訂正があります。

3話目のサブタイトルが変になっていました。
すみません。

昨日はバレンタインだったのに、結局家に居ました。まだ中2なんですけどね・・・

悲しいです・・・世の中にはいっぱいカップルとかいそうなのに・・・

・
そんなことを昨日は考えてました（笑）

せめてバレンタインの短編投稿してればよかったです。来年しようかな〜^^

では、また！

第4話・本当の気持ち

コナンと光彦は、歩美と元太と別れると、光彦の家に進んで行った。ーーーと思ったら、光彦は全く違う道に進んでいった。

「おい、光彦、お前んちこつちじゃねーんじゃねーか？」

コナンが聞くと光彦はうなずいた。

「はい、僕んちは両親両方とも教師ですから、晩御飯に招待するなんて、滅多にないです。それに僕が君を誘ったのは親に言えないような話題ですから」

それっきり2人とも無口になった。ただ黙々と歩き続ける。そして2人はファミレスに着いた。光彦が席に着くとコナンは反対側に座った。

「で？話ってなんだ？お前がこつそり俺に話すなんてワケがあんだろ？」

光彦は妙に真剣な面持ちになって言った。

「はい。実はコナン君、灰原さんが好きなんじゃないかって思って・・・なんか、僕、気になって・・・」

「はあ？ありえねえだろ？俺がなんで」

コナンは自分で言っておきながらなんとも言いがたい気持ちに襲われた。だが、それを光彦には言えなかった。けれど、光彦は気が付

いていた。

「コナン君・・・分かりやすいです。僕でさえ分かりますよ。その顔を見てたら」

光彦は気が付いていた。だからこそ、本当の気持ちを教えることを決意した。

それまでの沈黙はとても重かった。コナンが言い始めるまで気まずい雰囲気を訪れた。

「俺な・・・分かってるかもしれないけど、蘭のことが好きだった。本当に・・・けどな、最近違う気がするんだ。あいつの事本当に好きだったのか・・・10年間のこの気持ちは本物だったのか・・・わかんねえ。今でも蘭のことは気にしてる。けど、灰原のほうがその何倍も、気になるんだ。守ってやりたい。だから、今日光彦と行ってやれって言う発言、ショックだった。お前は光彦のほうが、つてな。光彦も灰原が好きなんだし、両思いだろ？なんかあるんなら手伝ってやるよ。俺の願いは灰原が幸せになることだからな」

最後のほうの言葉は自虐的だと自分自身が感じた。しかし、コナンは哀の幸せのためには仕方がないと思った。

「なんかねえか？」

コナンは再び聞いた。しかし、光彦は残念そうな顔をして答えなかった。それがじれったくなったコナンはさらに聞いた。

「ねえのか？あつたら聞いてやんぞ？」

光彦は、コナンのその態度にキレてしまった。普段の態度からは想

像出来なかった。

「コナン君！！僕、コナン君はそんな人じゃないと思ってました！
！僕の知ってるコナン君は、可能性が1パーセントでもあったら、
追いかけていく、絶対あきらめない、そんな人です。だから、今の
態度、全然コナン君らしくないです。もっと・・・輝いてください
！！そうじゃなかったら、コナン君をもう慕いませんから！！」

そこまで言われてコナンははっとした。そうーコナンは自分の
おろかさに気が付いたのだ。またそれと同時に今、蘭より哀が好き
なのだと自覚することが出来た。まだ、言うことまでは出来ないも
の、それ気がつけただけで十分だった。

「ありがとな、光彦！！」

光彦は今こそ自分の思いを伝えることにした。

「ええ、僕は灰原さんには1人で思いを伝えます！誰かに助けを借
りてなんて嫌ですから！！」

「おう、そうだな！」

2人は笑っていた。お互い正直になれたことに・・・

第4話・本当の気持ち（後書き）

あれ……

かなり久しぶりな気が（汗）
ほんつとくに……

すみませんでした！
最近投稿してませんね……

出来るだけ早いのを心がけたいです。

今回はコナン×光彦！！
これは1話編成です。

楽しんでもらえたらいいなあ……

では、次回またあいましょう（笑）

第5話・探せ、作戦

平次と哀は部屋の中で話し合っていた。

「じゃ、まず作戦や。最初の俺らの目標は“工藤の気持ちを毛利の姉ちゃんから逸らす”ことや。じゃあまずは・・・」

そう言っ取り出したのは、ミニスカだった。しかもかなり派手なやつだ。

「なっっ！こんなもの着るなんて無理よ!!」

哀はその洋服を見て、かなり動揺していた。平次はそれを見て、ちよっと笑ったあと、言った。

「工藤、落としたくないんか？」

平次はそう言って哀の目をみた。

平次は顔こそ笑っていたものの、目は全く笑っていなかった。それを見た哀はスカートを平次の手から奪い取ると言った。

「さっさと出て行きなさいよ！」

「小1なんやったら照れへんで？保護者がいたほ・・・あ」

平次が言葉を止めたのも無理はない。なぜなら彼の先にいる女の子の目は尋常じゃない威圧感があったからだ。平次は急いで部屋を出た。

時が経ち、哀が着替えを済ますと、平次が部屋に入ってきた。平次は驚いた。先程とは別人の女の子がいたからだ。

「あ、あんた・・・誰や？」

そう言われ、その女の子はムカツとしながら言った。

「私よ、私。変かしら？」

哀が照れながらそう言うので、平次は面白くなって来たようだった。

「いや、めっちゃかわいいで！これなら絶対行けるわ！！ただ・・・」

平次は一息置くと言った。

「工藤の代役がいるんや。どうしよか？」

「結局思い付かんかったな」

次の日の朝、平次はそう言った。そう。。。結局思い付かなかったのだ。

「まあ、仕方ないわよ」

そう言ったのは哀。2人は朝食を食べていた。平蔵は仕事に出掛け

た後で、静華も電話をしていたので2人で食べていた。その時平次は新聞を読んでいた。しばらく読んでいると、面白い記事を発見した。

それは怪盗キッドからの予告状が出た、と言うことだった。見出しはこうだ。

“怪盗キッド、大阪で予告！？天使の微笑み死守なるか？”

平次が読んでいる新聞を横から見ていた哀が口を挟んできた。

「へえ、ここから近いわね。天使の微笑み、どうやって盗むのかしら？まあ、変装するんでしょうけどね」

平次はそれを聞いて、大声を上げた。

「それやー！」

第5話・探せ、作戦（後書き）

今回、哀ちゃんと、平次中心の話になってますね（汗）
コナンは出しづらくって・・・

今回あとがき短かったです、許してください・・・

ではBYE・・・
（・D・*　、　つ

第6話・怪盗キッド参上？！

「なんなの？いきなり」

そう言ったのは哀。いきなり叫んだ平次を睨みつけながらの発言に平次は少し恐怖をも覚えたが、それを気取らせないよう、自分を落ち着かせ、そして話した。

「だ・か・ら・な、どうにかして工藤を振り向かせるんやろ？ってことはな、毛利の姉ちゃんが、工藤と別れるきっかけが必要や。だからキッドの変装で、工藤の変装してな、一緒にあんたが歩けばええ。本当は解毒剤あるんやろ？まさか、常備してたのが一個なんてありえへんやんな。たいてい2個以上はもつとるやん。ってことはあんたは最初は工藤に危険が及ばんように“ない”って言ったけど、だんだん違って来たんやろ？渡さへんのは危ないのと同時に、工藤と離れんように渡さへん……いや、渡したなくなつた……ちやうか？」

哀は戸惑った。新一と違い、隙だらけにみえる平次は実は新一よりも鋭い観察眼、推理力を持っていたことに。そう思っていると平次が話しかけてきた。

「もしかして工藤が気づいてなかったって思つとるんか？でもな、それは間違いや。あいつは恐らく分かつとる。けど言わへんのや。あんたを傷つけないんやろ。だから、もしかしたら……な」

哀はそれを聞いて、やはり探偵はナメるべきじゃないと改めて感じた。やはり、常人とは違う、そう感じた。

その後、2人は頼むため今夜について、相談し始めた。

今日はキッドの予告した日。天使の微笑みは大阪ではかなり話題になったこともある宝石だった。だからか、かなりの人数がキッド見物に来ていた。

「ふっ、今日も簡単だったな。いや、やっぱり名探偵がいないと手応えねえなあ。今日は1人で来て正解だな」

快斗はそう独り言を言った。勝利を確信したその発言にカチンときた平次は手順を無視して哀を抱えて飛び出してしまった。

「ちょっと、手順通りにしないの？」

「今がチャンスやんか。どう考えたってこの隙を狙う方がええで」

平次は自信に満ち溢れた目をしていた。だからもう哀は止めなかった。

平次は快斗が隙を見せた瞬間、飛び出していった。

「お前、ちょっと待てや」

「え”っ」

快斗が驚くのも無理はない。なぜなら平次は怪盗キッドに気配を感じさせずに背後まで来たのだから・・・

「こっ、この怪盗キッドが逃げられないわけ・・・」

そこまで言ったとき平次は背後から快斗の右手首を掴んだ。快斗は手を挙げた状態になり、簡単に身動き出来ないだろう。そう哀が判断した時、平次がまたまたとんでもない事を言い出した。

「ホントは動けるんやろ？怪盗キッド君？」

快斗はそう言われた瞬間、すでに平次と哀の方へ向いていた。

「なんで分かった？お前は確かに俺が動けば痛くなるように持ってたじゃねえか」

平次は当たり前やないかと呟き、答えた。

「いや、ホントは離せたんやろ？俺やつて本気で掴んでんのやけどな。まあプロには逃げられてまうわ。で、その隙に逃げる、それがあんたの作戦や。けどな、俺らが来たんは天使の微笑み取り戻しに来たんやない。あんたに頼みがあつて来たんや」

それを聞いて、快斗は真剣な顔になった。

「探偵が俺に頼みごとか・・・いいぜ、聞いてやる。でも、ホントに要らねえのか？」

そう快斗が聞くと、平次は笑い始めた。

「何がおかしいんだよ！！」

「俺はな、工藤みたいに正義感の塊やない。だから別に捕まえたりせえへんわ」

そこまで聞いて、快斗は安心したのか、本題に入ることにした。

「で、頼みって?」

平次は待ってた、と言わんばかりの顔をして答えた。

「ああ、デートして欲しいんや。行って欲しいんは、この日やな」

「文化祭の日・・・ね。仕方ないな。手伝ってやるよ。そんで? 誰と?」

平次は怪しげな笑みを広げた。その姿は見ていただけの哀が怖かったというのだからよっぽど怖かったのだろう。そんな顔で、平次は言った。

「この人や」

そう言つて哀を指した。

「えっ! このガキと?」

快斗は露骨に嫌そうな顔をした。しかし平次が快とのそばまで行つて耳打ちをすると、態度が変化した。

「なるほど。元の姿で・・・か。いいな、こんな美人とデートなんて滅多に出来るもんじゃねえ。任せてくれ。ギャラは要らねえよ」

「そついつと思つたで!」

そついつて快斗と平次はしばらくこのときのことについて話してい

た。哀が話題に入るのも許さないほどの徹底振りに哀は驚いた。

「どうせ、偽物なんだから私に聞かせてくれてもいいじゃない」

知らぬ間にそうつぶやいていた。

第6話・怪盗キッド参上?! (後書き)

久しぶりです!!

ってか本当に久しぶりですね(汗)

もう忘れ去られているんじゃないかな・・・

今回怪盗キッド参上ってタイトルの割には怪盗キッドの盗む場面はカットされています。

それは怪盗キッドはもう一回盗むからです。もちろん宝石をだからカットさせていただきました!

今回はこんだけですが、次はもうちょっと頑張って書きたいと思います!

あまりにも話の進みが遅いので・・・

では、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0650g/>

それでもあなたが好きだから・・・

2010年10月18日23時29分発行